

## 地球人として共に生きる

### 医療通訳は、異文化理解の担い手、安心を運ぶ

岐阜大学大学院医学系研究科 教授 高橋優三



岐阜県でも医療通訳の育成が始まった。とても嬉しいことである。日本に居住している外国人が身近に増えるにつれ、共生への取り組みは各地で行なわれているが、医療における理解促進、つまり外国人が安心して日本の医療を受けられる体制を構築するのは、地域社会の急務のひとつである。医療通訳者は、医療文化の差による無毛の不幸を解消する役であり、その重要性を理解した先人達の努力で育成の基盤ができあがっている。この教材は、医療通訳の育成の一助となることを願って作製された。

異国へ来ると、期待も大きい不安も大きい。同じ地球人でありながらも、育った文化が異なると、相手の真意を理解するのはけっして容易ではないからだ。医療の分野はさらに大きな問題を抱えている。同じ日本の文化圏の中にあっても、医療の分野は特殊であり、日本人でさえも理解が容易ではない。しかも自分の体のことである。理解が間違っていたとき、笑って済まされる話ではない。つまり外国から来た人が日本の病院にかかることの不安は、想像を絶するほど大きい。この不安を少しでも解消するのが、医療通訳の役目である。医療通訳は、異文化理解の担い手であり、患者に安心を運ぶ。

人類の一部が発祥の地アフリカを離れ、全地球に広がったが、各地で永年にわたって隔離された。このため多くの人種と無数の文化が誕生したが、約500年前の大航海時代からその融合が進み、さらに近年の国際交流は劇的で、単一文化地球人の時代が遠い将来には実現するかもしれない。しかし、現在はまだ多文化・多人種の共存を目指している時代である。自分の母なる文化と異なる文化をいかに正しく理解し、いかに互いの安心を共有するのか、必死に模索している。その意味では、私達は、挑戦的な時代を生きている。

医療通訳者は、少なくとも2つの言語に長じていなければならない。そして2つの文化にも。さらに医療の分野に独特の文化背景（医師・患者関係、死生観）や、医療の専門用語（病名、検査用語）などの理解も求められる。もちろん、通訳としての基本倫理（守秘義務、中立性）なども必須である。こうなると誰が医療通訳者になれるのか、とても困難のように思ってしまうが、関係者の熱意があれば、意外に簡単かもしれない。

異文化に裏打ちされた異なる言語の通訳には、言葉と言葉の対応をするよりも、言葉と、それが発せられた時の状況を対応させて学ぶのが望ましい。その主旨に則り本冊子にあるシナリオは、患者役と医師役のロールプレイに臨席しつつ通訳技術を学ぶように作られている。またそれぞれの状況に応じて、通訳としての留意点や医学の専門用語が学べるように配慮されている。

不備な点が多々あるかと思われませんが、この教材が、志を同じくする人々の熱意に支えられて医療通訳者の育成につながり、育った人々が不安に怯える患者の傍へ、天使のように舞い降りてくれることを期待しています。

（平成23年2月 厳寒の岐阜にて）